

知的障害特別支援学校生徒の QOL 向上を図る 学校教育実践に関する研究 —新設した課外活動（部活動）を通して—

木田 泰介*・木村 進哉*・佐藤 克敏

Investigating the Impact of Club Activities on the Quality of Life of Students with Intellectual Disabilities in Special Schools: An Evaluation of Newly Implemented Practices

Taisuke KIDA*, Shinya KIMURA* and Katsutoshi SATO

Accepted June 13, 2023

抄録：保護者アンケートと生徒のインタビュー結果を、テキストマイニングにより分析を行うことで、部活動が参加生徒の QOL の向上の要因となるか否かについて検討した。分析の結果から、保護者のアンケート及び生徒のインタビュー結果ともに、部活動や大会やコンクールを楽しみとしていること、部活動そのものや部活動を通じた友人との関わりを楽しんでいること、周囲からの評価や賞に対するの期待などが自信や意欲につながることなどの意識を読み取ることができた。本結果は、部活動が余暇活動として有意義であり、かつ QOL の向上につながりうるものであることを示唆するものである。

索引語：QOL、知的障害のある生徒、部活動、特別支援学校

Abstract: This research aims to explore the potential benefits of club activities in enhancing the quality of life for students with intellectual disabilities. The study involves a combination of parent questionnaires and interviews with participating students. Text data from both parents and students were subjected to co-occurrence network analysis. The findings of this study are as follows: 1) The students exhibited eagerness towards club activities, competitions, and contests. 2) They derived enjoyment from engaging in club activities and developed meaningful relationships with their peers. 3) Their confidence levels were boosted when they received recognition and awards from others. These results highlight the significance of club activities as a leisure pursuit, suggesting that they play a vital role in enhancing the overall quality of life for students with intellectual disabilities.

Key Words: QOL, Adolescents with Intellectual Disabilities, club activities, Special School

* 京都教育大学附属特別支援学校

1. はじめに

従来から、知的障害のある人の余暇活動は、課題として取り上げられてきた。余暇活動に関する課題は現在も同様のことが語られており、「障害者の権利に関する条約」の第30条においても「障害者が他の者との平等を基礎として文化的な生活に参加する権利を認める」ことが取り上げられている。本条項には、障害者が他の者との平等を基礎としてレクリエーション、余暇、観光、スポーツなどの機会が持てるようにする措置をとること、社会を豊かにするためにも、自己の創造的、芸術的及び知的な潜在能力を開発し活用することをできるようにすることなどが記されている。

松下・福本（2022）は、放課後の過ごし方に関する余暇活動の調査を行い、知的障害のある子どもは活動レパートリーが乏しく、テレビや動画鑑賞などの受動的な活動が多いため、豊富な余暇活動を補償することが重要であると指摘した。また、南條・新沼（2009）は、余暇活動を制限しているのは能力ではなく、機会の欠如であり機会の欠如は能力の低下をもたらすことを指摘している。彼らは、知的障害のある人の質問紙調査に、QOL（生活の質）尺度を利用し高活動群と低活動群にわけて比較分析したところ、高活動群は低活動群に比べて、QOL尺度の評価が高いことを報告し、QOLを向上させるために余暇活動を享受することができる支援が必要であることをしている。

さらに、余暇活動の充実と同時に、関連付けて知的障害のある人のQOLの問題が取り上げられることが多い。厚生労働省（2002）の関連用語解説によれば、QOLは「障害者にとっての生活の質とは、日常生活や社会生活のあり方を自らの意思で決定し、生活の目標や生活様式を選択できることであり、本人が身体的、精神的、社会的、文化的に満足できる豊かな生活を営めることを意味します。」と定義づけられる。「満足できる豊かな生活」について、古屋・三谷（2005）は「豊かな生活」は物質的な豊かさを連想させることから「充実した生活」と表現する方が適切であるとしている。また、前述の解説から読み取れる「自らの意思で決定し、生活の目標や生活様式を選択できる」は、「自己選択」「自己決定」のことであり、これは知的障害のある児童生徒の教育においても重要視される事柄である。

学齢期の知的障害のある生徒のQOLを考えると、QOL向上を図るためには、まずは日々の学習活動を充実させる必要があると考える。普段の学校生活の中で、いかに「充実した生活」を送ることができているのか、また、「自己選択」「自己決定」の機会がどのくらいあるのかを検討することは重要なことであろう。また授業だけでなく、学校行事を中心とした学校生活の中でも、児童生徒の「自己選択」「自己決定」が大事にされ、質の高い多様な経験をすることで、「充実した生活」が得られるようにすることも必要であると考え。加えて、松下ら（2022）が指摘するように、知的障害のある児童生徒の放課後の余暇活動を充実させることも重要であろう。近年放課後の余暇活動は、放課後等デイサービスが一般的となり、多くの児童生徒が放課後等デイサービスを利用している。しかしながら、全ての生徒が放課後等デイサービスを利用しているわけではない。加えて、放課後等デイサービスの活動も法人によって様々である。基本は日常生活動作や自立生活を支援するための活動、創作活動や余暇の提供も求められているが（厚生労働省，2015）、提供されるサービスの質が事業者によって異なることや専門家との連携不足、人手不足なども指摘されている（伊藤・竹内，2019）。

学校教育段階では、放課後の活動に部活動がある。今宿・朝倉・作野・嶋崎（2019）は、これまでの部活動の研究における効果の類型化、効果研究の変遷、今後必要とされる効果に関する検討を整理している。その中で、「身体の発育発達」「ストレス・精神健康」「スポーツの継続性」に関する効果が検証されていると指摘している。また、樽木・木村・高田（2017）は、現場教員の聞き取り調査の結果から、部活動が生徒の問題行動の予防に役立つと考えられていることを報告した。しかしながらこれらの研究は、障害のない生徒の部活動を対象とした研究であり、知的障害のある生徒を対象とした研究ではない。特別支援学校の部活動に関する研究では、東京都の特別支援学校を対象とした調査において、約 79% の学校で部活動を実施していること、運動部のように複数の競技を含めて活動への参加を重視した種目設定をしていることなどが報告されている（阿部・村山，2018）。しかしながら、知的障害のある生徒の学校部活動に関する研究は少なく、どのような効果をもたらすのかについて検討している研究は見当たらない。

前述したように、知的障害のある人の余暇活動と QOL の関連、放課後の余暇活動の課題などが指摘されている。本校は、これまで本課程外の学びである部活動を提供してこなかったが、2022 年度より週 1 回程度の部活動を実施している。部活動は生徒にとっての自己実現の場であり、特別支援学校においても同様に、自主的・自発的に参加する活動であるとも言える。また、部活動は、地域と関わる機会を創設することが可能な取組みでもある。1 年間を通して実施した部活動では、保護者からも高い評価を受け、生徒も積極的に参加した。加えて、いくつかの大会やコンクールでメダルや賞をとる生徒もあり、このような経験は生徒の部活動への意識に影響を与えたと考えられる。本研究では、年度末に実施した保護者アンケート及び生徒へのインタビュー調査を分析することで、本校において新たな教育活動として設けた部活動が、参加した生徒の QOL 向上の要因となり得たかどうかについて検討することを目的とする。

2. 方法

(1) 対象

A 特別支援学校において部活動に参加した生徒のうち、口頭による質問の意図を理解して回答することができるもの、部活動にほぼ毎回参加しており、選択肢や教師による言語化の補助などの支援があれば回答することが可能なものを対象としてインタビュー調査を実施した。内訳は、中学部 4 名（スポーツ部 3 名、文化部 1 名）及び高等部 5 名（スポーツ部 3 名、文化部 2 名）であった。また、部活動に参加したすべての中学部及び高等部の生徒の保護者を対象として、アンケート調査を依頼した。

(2) 手続き

1) インタビュー調査

インタビュー調査の条件を満たした生徒である中学部 4 名、高等部 5 名の生徒を対象として、部活動に関する感想を質問した。インタビューは、半構造化面接で行った。質問内容は、自分が所属した部に参加した理由、部活動を楽しみにしていたか、部活動がなかった時と部活動が始まってからどちらが楽しいか、部活動をやって自信がついたことはあるか、来年度は部活動

に参加するかなどであった。内容については録音を行い、録音された音声データをもとに教師の行なった支援も含めながらテキスト化した。

2) アンケート調査

A 特別支援学校の中学部、高等部の保護者に対して、オンラインによる無記名のアンケートを依頼した。アンケートの内容は、部活参加回数、大会や展示会等への参加状況など部活動の参加に関する内容と KINDL^R を参考として作成した（古荘・柴田・根本・松寄，2014）、学校生活が充実したと思うか（以下学校生活）、自信がついたと思うか（以下自尊感情）、楽しみが増えたと思うか（以下精神的健康）などの QOL に関する項目および部活動に参加した感想（以下部活動の感想）であった。回答はそれぞれの項目について、「とてもそう思う（もしくはよかった）」から「全くそう思わない（もしくはよくなかった）」の 4 件法による評定とそれぞれの評定についての理由を聞く自由記述の項目から構成した。数量的な分析の際には、それぞれの評定の人数を算出するとともに、「とてもそう思う（もしくはよかった）」を 4 点、「全くそう思わない（もしくはよくなかった）」を 1 点として、平均及び標準偏差を算出した。

(3) 自由記述及びインタビューデータの分析について

自由記述及びインタビューデータの分析は、KH Coder を利用して、単語頻度分析で出現回数を確認し、回答者にかかる動詞（～と思う・～と考えるなど）を除外した。また、フライングディスクや部活動などの単語で、フライングとディスクに分かれたり、部と活動に分かれたりする場合には、「フライングディスク」「部活動」として一つの単語として抽出するように設定した。その後、関連する語を整理しテキストデータを KH Coder を用いて、単語頻度分析で出現回数を分析した。また、単語および概念間の結びつきを探るため、174 文を抽出したインタビュー調査は、最小出現数 5 回、最小文書数 1 回、アンケート調査のうち部活動の感想（53 文）、学校生活（34 文）は最小出現数 3 回、最小文書数 1 回、自尊感情（21 文）および精神的健康（19 文）は、最小出現数 2 回、最小文書数 1 回の条件で共起ネットワークを作成した。

(4) 倫理的配慮

依頼内容には、研究目的及び調査項目、収集したデータに関する扱い、個人が特定されないことに対する配慮、回答しなくても不利益にならないこと、質問紙の提出を持って、本調査に同意したとみなすことなどを記載し、回答を求めた。インタビュー調査は、インタビュー調査に回答できると思われる生徒のみを対象として、途中でやめたかったら教えてくださいと伝え、部活動について感想を教えてくださいと教示して実施した。分析及び執筆については個人が特定されないように配慮した。

3. 結果

(1) 保護者アンケート調査について

アンケートの質問項目のうち、QOL に関する学校生活、自尊感情、精神的健康と部活動の感想の評定結果を表 1 に示した。2 名もしくは 1 名の保護者を除くほとんどの保護者が、とても

そう思う（よかった）もしくはどちらかというとそう思う（よかった）と回答した。

保護者の評定理由について、KH Coder を利用して自由記述を分析し、出現頻度の高い単語を抽出した。抽出した単語のうち単語の出現回数の多い単語と出現頻度を表 2 に示した。QOL に関連する質問項目である学校生活に関する質問では、「部活」「充実」「活動」「スポーツ」「楽しむ」、自尊感情では「意欲」「自信」「大会」「参加」など、精神的健康では「楽しむ」「行く」「増える」などの単語が抽出された。部活動の感想では、「部活動」「活動」「参加」「放課後」などの単語が抽出された。

表 1 保護者アンケートの評定結果について (N=28)

評定	学校生活	自尊感情	精神的健康	部活動の感想
とてもそう思う（よかった）	19	16	14	25
どちらかというとそう思う （よかった）	7	10	12	2
どちらかというとそう思わな い（よかった）	2	2	2	1
全くそう思わない（よかつ た）	0	0	0	0
平均	3.61	3.50	3.43	3.86
標準偏差	0.63	0.64	0.63	0.45

表 2 自由記述から抽出した単語と単語の出現回数

学校生活		自尊感情		精神的健康		部活動の感想	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
部活	14	意欲	5	楽しむ	4	部活動	14
充実	7	自尊感情	5	行く	3	活動	8
活動	6	大会	5	増える	3	参加	7
スポーツ	5	参加	4	運動	2	放課後	7
楽しむ	5	作品	3	過ごす	2	楽しい	5
学校	4	試合	3	学校	2	今後	5
機会	4	自分	3	時間	2	スポーツ	4
好き	4	出来る	3	出来る	2	学校	4
参加	4	学校	2	大会	2	経験	4
放課後	4	活動	2	放課後	2	見る	4
本人	4	頑張る	2	本人	2	作品	4
		喜ぶ	2	話	2	子供	4
						先生	4
						増やす	4
						良い	4

学校生活に関する自由記述データの共起ネットワーク図を図1に示した。分析の結果3つのグループが抽出された。第1グループは「部活」「充実」「学校」「嬉しい」「自分」「参加」の単語が抽出された。このグループで最も出現回数が多い「部活」の文脈をKWIC (Keyword in context) コンコーダンスにより確認したところ「好きなことを部活動として楽しめている充実した1日になる」「部活がある日を楽しみにしていました」「他の学校の子と同じように部活に参加できているというのが嬉しかった」などの文が確認された。第2グループは「活動」「放課後」「楽しむ」の単語が抽出され、最も出現回数が多い「活動」には、「部活動をすることにより友人との活動や下校を楽しんでできるようになった」「好きな活動を選び取り、その上で没頭できていた」などの文が認められた。第3グループは「スポーツ」「本人」「体」「動かす」「機会」の単語が抽出され、最も出現回数が多い「スポーツ」をみると「部活に入ったからといってスポーツが上手くなったわけではないが、体力をつけることにつながったり・・・」「帰宅してからもてあましていた時間がスポーツに変わり、本人も楽しかった、怒られたなど話してくれたりします」などの文が認められた。

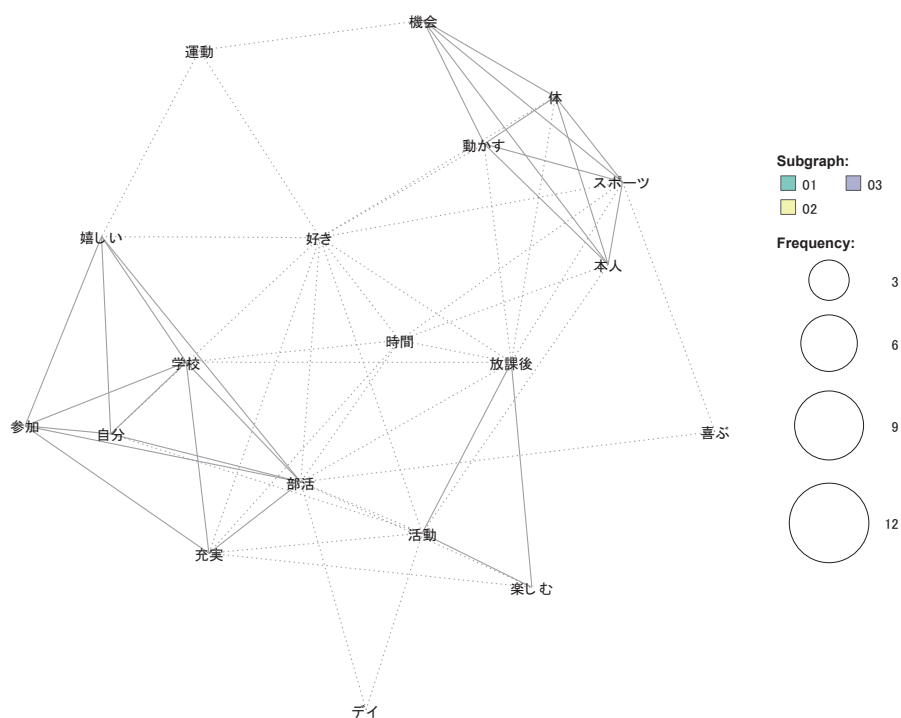


図1 学校生活に関する記述の共起ネットワーク

精神的健康に関する自由記述データの共起ネットワーク図を図2に示した。分析の結果3つのグループが抽出された。第1グループは「放課後」「時間」「過ごす」「増える」の単語が抽出されており、最も出現回数が多い「増える」の文脈をKWIC コンコーダンスにより確認すると、「放課後の過ごし方の選択肢が増えた」「余暇を他の人と過ごす時間が増えた」「他学部間との関わりもでき、興味関心が増えたように思う」などの文が確認できた。第2グループは「運動」「出来る」の単語が抽出され、出現回数が多かった「出来る」をみると、「友達と一緒に帰ることが

できる」「自分にもできる運動があるとわかったから」などの文が認められた。第3グループは「楽しむ」「学校」「行く」の単語が抽出され、最も出現回数が多い「楽しむ」をみると「部活動を楽しみに学校に行っていた」「次の大会を楽しみにしている」などの文が認められた。

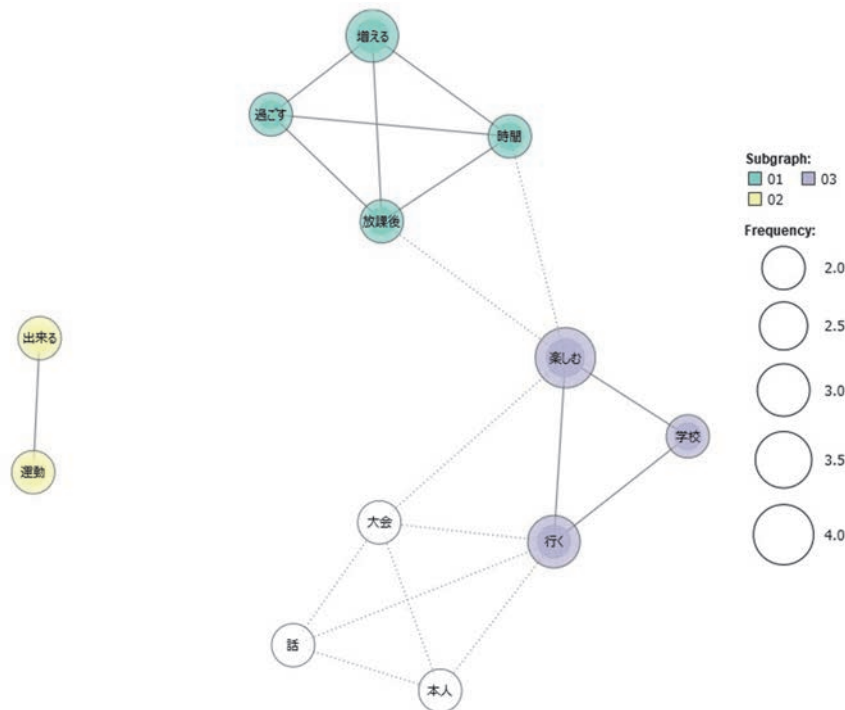


図2 精神的健康に関する記述の共起ネットワーク

自尊感情に関する自由記述データの共起ネットワーク図を図3に示した。分析の結果5つのグループが抽出された。第1グループは「大会」「出場」「繋がる」の単語が抽出され、最も出現回数が多い「大会」について確認したところ、「出場した大会でメダルをいただいたことをとても喜んでいた」「競技大会に出場し成績をおさめることでやる気を持続することができた」などの文が確認できた。第2グループは「意欲」「参加」「活動」「学校」「次」の単語が抽出され、最も出現回数が多い「意欲」には、「評価してもらえることで自信につながってきたので色々なことにも意欲的に参加するようになった」「前向きな態度や意欲を部活動に参加したことにより感じる」などの文がみられた。第3グループは「自信」「作品」「自分」「見る」「展示」の単語が抽出され、最も出現回数が多い「自信」をみると「正直に申し上げれば自信がついたかは分かりません。ただ下校時の表情が悪くなかったので楽しめたのではないのでしょうか」「自分の作品が展示されているのを見ることで自信はついたのではないかと思う」などの文が確認できた。第4グループは「部活」「頑張る」の単語が抽出され、「部活を頑張ったと伝えにきてくれます」「(大会に参加し賞をもらうことで意欲もましたように思う) 必死で頑張るようになっている」などの文が確認できた。第5グループは「評価」「出来る」の単語が抽出され、出現回数が多い「出来る」をみると「(意欲的に参加するようになり) 今までできなかったことができるようになってきた」「出来た作品が周りにも評価してもらえることで自信につながってきたので・・・」などの文が確認できた。

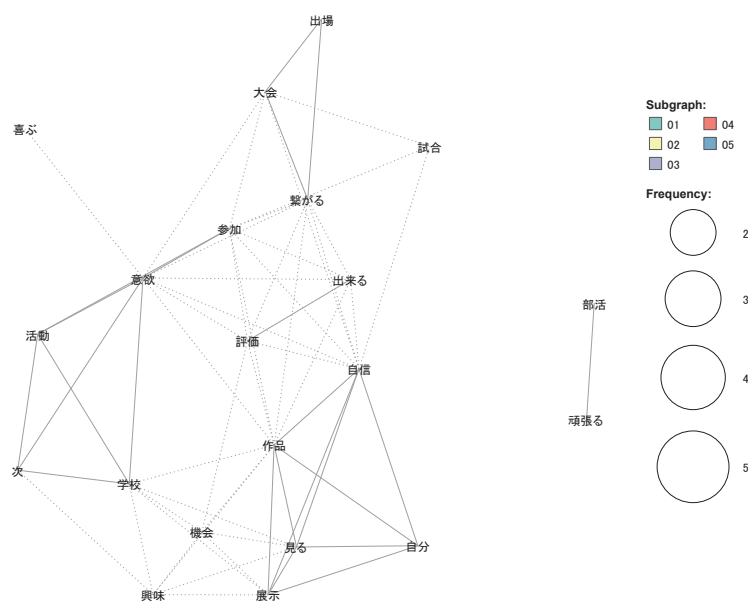


図3 自尊感情に関する記述の共起ネットワーク

部活の感想に関する自由記述データの共起ネットワーク図を図4に示した。分析の結果5つのグループが抽出された。第1グループは「嬉しい」「今後」の単語が抽出されており、出現回数が多い「今後」をみると、「今後も継続していただければ嬉しく思います」「今後も時間のあ
る限り、活動日数を増やしていただけたら」などの文が確認された。第2グループは「活動」「ス
ポーツ」「楽しい」「学校」「みる」の単語が抽出され、最も出現回数が多い「活動」には、「授
業とはまた違う活動の場に自分がいることを楽しんでいました」「もっと活動を増やしてほし
い」。第3グループは「内容」「良い」「もう少し」の単語が抽出され、最も出現回数が多い「良い」
をみると「参観等できる機会があったら良かったなあと感じました」「競技大会の参加も良い経
験になります」「余暇活動の一つになれば良いなと思っています」などの文がみられた。第4グルー
プは、「部活動」「放課後」「参加」「デイ」「子ども」「続ける」が抽出され、最も出現回数が多
い「部活動」をみると「部活動に参加することにより、自宅でゲームなどで遊ぶ時間が少なく
なるのでよかったと思います」「家でゲームをするか放課後デイに行くしかなかったのが、部活
動という選択肢ができて嬉しく思います」「部活動のある日は楽しみに学校に行っています」な
どの文がみられた。第5グループは、「時間」「経験」が、第6グループは、「本当」「感謝」が
抽出された。

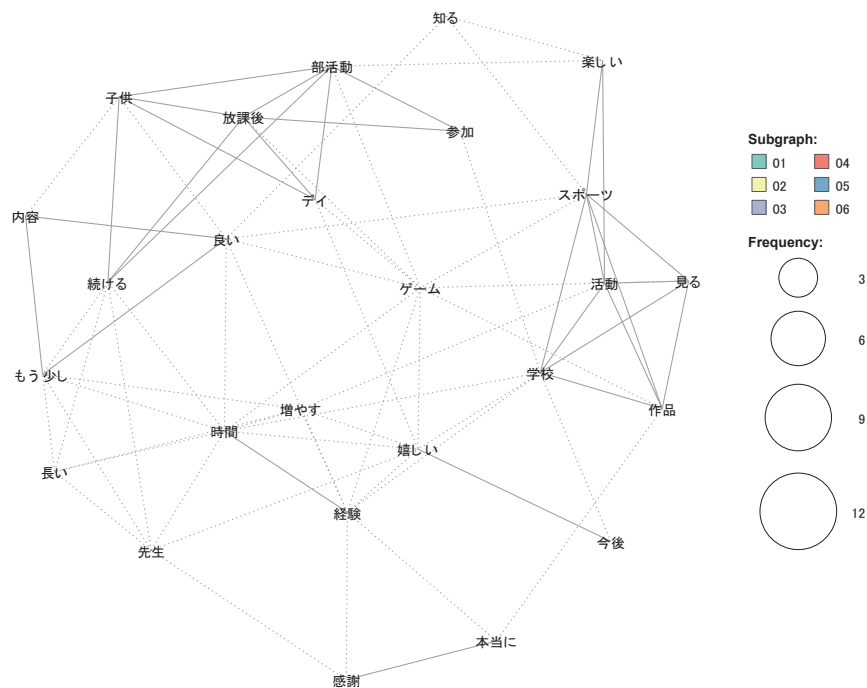


図4 部活の感想に関する記述の共起ネットワーク

(2) 生徒インタビュー調査について

表3にインタビューにおいて抽出された単語と単語の出現回数を示した。「楽しい」「描く」「部活」「文化部」などの単語が多く抽出された。抽出された単語に基づいて共起ネットワーク分析を行った。その結果を図5に示した。共起ネットワーク分析の結果、5つのグループが抽出された。第1グループは「大会」「嬉しい」「出る」の単語から構成された。このグループで出現回数が最も多い「大会」の文脈を確認すると、「大会の時に相手のサーブが早くてびっくりした」「フライングディスクの大会はでたい」「大会に出ることができたら嬉しいです」などが確認された。第2グループは「楽しい」「俳句」「みる」の単語が抽出された。このグループで出現回数が最も多い「楽しい」は、「イラストとか俳句とか楽しかったです」「卓球バレーが楽しかった」など、部活で経験した楽しかったことが語られていた。第3グループは「描く」「絵」「作品」「作品」「自分」「出す」「デジタル」の単語が抽出された。このグループで出現回数が最も多い「描く」をみると「絵を描くのが好きやから最後は文化部にしたんですね」「それぞれが作品を描いて発表しましょうとか」などの文が認められた。自分の描く作品であったり、描くことの楽しさであったりが語られていた。第4グループは、「文化部」「人」「好き」が抽出され、「文化部」をみると「文化部でできる範囲を広げたい」「スポーツ部で走ってよかったし、文化部もむっちゃ体験できてよかったし、やめたくない」などが語られていた。第5グループは、「取る」「賞」であった。「あれ（フライングディスク）が楽しかった。メダルも取ったし」「（賞を）取ってみたい」などの文が認められた。

第1グループに見られるように、大会等に対する生徒の反応は概ね良好であった。しかしながら、エピソードではあるが、大会等で外部の客観的な評価を初めて経験する生徒が多く、何

人かの生徒にショックを受けた様子も認められた。例えば、ある生徒は 100m 走でコースアウトしたため、失格となり記録が残らなかった。当該生徒はとてもショックを受けて号泣したが、周囲からの励ましもあり部活を辞めることはなかった。加えて、次のフライングディスクの大会では記録を残すことができたことをすごく喜んでいた。

表 3 インタビューから抽出した
単語と単語の出現回数

インタビュー	
抽出語	出現回数
楽しい	28
描く	18
部活	17
文化部	13
絵	11
卓球バレー	11
大会	10
取る	8

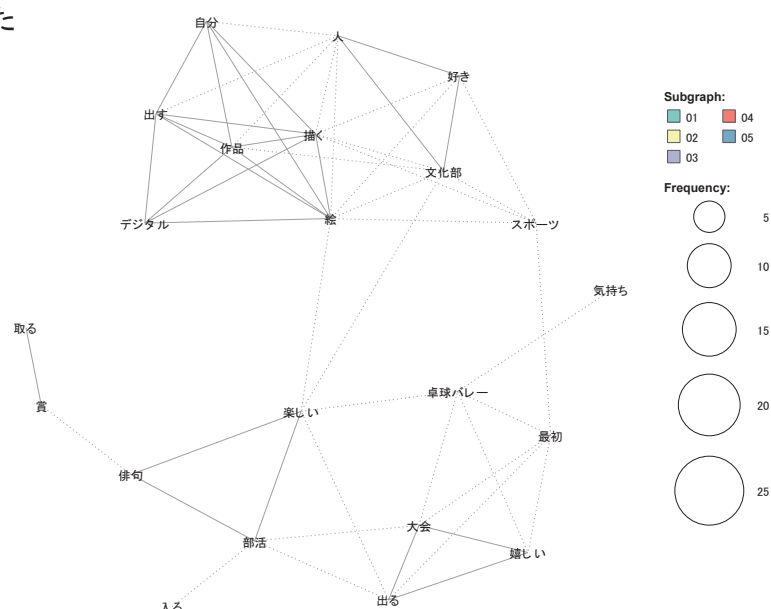


図 5 生徒のインタビューに関する共起ネットワーク

4. 考察

本研究では、本校で実施した部活動に参加した生徒の QOL 向上の要因となり得たかどうかについて検討するために、保護者アンケート及び生徒へのインタビュー調査を実施・分析し、テキストマイニングによる分析を用い、QOL に関係する要素がどのように語られたかについて検討した。

保護者のアンケート調査の結果から、QOL を参考とした質問項目の評価は高く、ほとんどの保護者が「とてもそう思う」「どちらかというと思う」のいずれかに回答していた。加えて、その理由についての記述に関する共起ネットワーク分析の結果から、学校生活において、部活動だけでなく、学校、友達との関わりなど楽しんでいること、精神的健康については、余暇活動の選択肢が増えたこと、学校や大会を楽しみにしていること、自尊感情については、大会で賞を取ることを励みにしていたり、周囲からの評価が自信となり意欲につながっていたりすることが抽出できた。本結果は、ほとんどの保護者が「とても良かった」「どちらかという良かった」と回答し良好な評定が得られただけでなく、その理由についても QOL に関連する内容が記述されていることを示しており、部活動が QOL に良い影響を与えていることが推測できると考えられる。共起ネットワーク分析の結果から、今後も活動を継続・増やしてほしいという要望や感謝、有意義な余暇活動となっていると感じていることなどが抽出できた。本結果を含めて

考えると、保護者の意識について部活動は子どもの余暇活動や教育活動として有意義であり、QOL の向上につながり得るものであると評価したと考えられる。

生徒のインタビュー結果からも同様に、大会に出ることや部活動そのものの楽しさ、賞を取ることを動機とする意識、今後も部活動を続けたいと思う気持ちなどを抽出することができた。本結果で抽出できた生徒の思いは、部活動が充実した経験となっており、部活動に参加・活動することや大会やコンクールに参加して賞を取ることが楽しみの一つとなっていること、今後も部活動を続けたいと思うなど生活する上での励みとなっていることなどが推測できた。大会時のエピソードから考えれば、外部の客観的な評価が厳しいことを経験する機会ともなっていたが、日々の教育活動の中で育まれている教員や友人に対する信頼に基づく周囲からの励ましなどがベースにあることが、部活動の継続や大会等への高い動機につながっていると考えられた。本結果からも保護者のアンケート結果と同様に、日々の教育活動で培われた自尊感情や周囲への信頼感を基盤として、部活動を経験することは、生徒の自尊感情や精神的健康に好影響を与える可能性があり、QOL の向上につながり得るものであると考えられた。

本研究の結果から、知的障害のある生徒の部活動が余暇活動及び教育活動として有意義であること、QOL の向上を図る一要因となることが考えられた。部活動は、自分で活動を選択できることと同時に、大会やコンクールなどの外部の客観的な評価が得られるという特徴がある。外部の客観的な評価はある意味厳しい評価であるが、本研究では生徒にとってこれは部活動への大きな動機付けともなることが示唆された。しかしながら、部活動の厳しい外部からの客観的な評価が動機付けとなるためには、日々の授業や生活で得られている自尊感情や周囲への信頼感がベースにあることが重要であると考えられた。しかしながら、本研究では、部活動の参加の有無が QOL に与える影響の違いを評価したわけではない。そのため、通常の学校生活や放課後の過ごし方よりも、部活動に参加することが QOL の向上により大きな影響を与えるということが検証できたわけではない。また、特に生徒へのインタビューでは、極力誘導しないように質問しているものの、質問が肯定的な言動を誘導している可能性がないとは言いきれないだろう。知的障害のある生徒の QOL の向上に対して、日々の授業や部活動が影響するプロセスについては、今後も検討する必要があると考えられる。

<追記>

本研究は、令和 4 年度京都教育大学教育改革研究・改善プロジェクト経費「特別支援学校の課外活動に期待される教育効果の検討—大学・附属特別支援学校共同での部活動新設を通して—」の配分を受け、実施された研究成果である。

5. 引用・参考文献

- 伊藤真子・竹内康二（2019）放課後等で日サービスの意義と課題・職員と専門家の相談内容の分析・職員への質問紙を通して・明星大学心理学研究紀要, 37, pp.13-24.
- 今宿裕・朝倉雅史・作野誠一・嶋崎雅規（2019）学校運動部活動の効果に関する研究の変遷と課題. 体育学研究, 64（1）, pp.1-20.

厚生労働省（2002）身体障害者ケアガイドライン～地域生活を支援するために～

<https://www.mhlw.go.jp/topics/2002/04/tp0419-3a.html> 2023 年 4 月 9 日最終閲覧

厚生労働省（2015）放課後等デイサービスガイドライン.

<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyokushougaihoukokenfukushibu-Kikakuka/0000082829.pdf> 2023 年 4 月 9 日最終閲覧

樽木靖夫・木村昭雄・高田麻美（2017）学校現場におけるクラブ活動及び部活動の現状と課題.
千葉大学紀要, 66（1）, pp.27-34.

古荘純一・柴田玲子・根本芳子・松寄くみ子（2014）子どもの QOL 尺度その理解と活用. 診断と治療社.

松下浩之・福本稜佑（2022）知的障害のある子どもの余暇活動に関する調査研究 - 放課後の過ごし方についての実態と保護者の評価 -. 障害科学研究, 46, pp.149-162.

南條正人・新沼英明（2009）知的障がい児（しゃ）の生活の質（QOL）分析 - 余暇活動のその支援を中心に -. 山形短期大学紀要, 41, pp.117-134.